

1. グローバリゼーションと地域の諸問題

2013年4月、同志社大学14番目の学部として、グローバル地域文化学部が開設されました。伝統ある同志社大学今出川校地の中の、最も新しいキャンパスである烏丸キャンパスに本拠を構えています。新築の志高館が本学部の最初の学生たちを迎えました。ここにはグローバル・スタディーズ研究科や国際教育インスティテュートもありますから、古都京都の真中で、本学部の学生たちはいきなり国際的な雰囲気の中の中に置かれています。この環境が本学部学生たちにプラスに働いてくれることを心より願ってやみません。

冷戦体制が終わりを告げ、世界が新たな秩序のもとに構築されていく過程と踵を接するようにして広まったグローバリゼーションの波は、今や私たちの生活をすっぽりと包んでいます。20年前ならば到底不可能であった、ヒトやモノ、サービスや情報 の自由かつ迅速な移動が実現し、私たちはそれを当たり前の環境として受け入れていきます。

しかしグローバリゼーションという現象は、それが「地球」(earth)を単位とする運動であるかぎりにおいて、必然的に世界のそれぞれの地域の特性を切り捨ててしまいかねません。結果として現在の世界では、グローバリゼーションの動きによって引き起こされた摩擦や衝突が解決されるべき重要な課題となっています。このような摩擦や衝突はしばしばそれぞれの地域が有する文化の特殊性——それは言語、宗教、歴史などの要素が重層的に形成しているものですが——に対する無理解や理解不足から生じるものであることが多いのです。したがって、現在の世界で活躍できる(それは必ずしも外国で働くことを意味しません)優れた人物とは、今現実には目の前で起こっているグローバリゼーションという未曾有の現象を大前提としつつ、地域の有する豊かな文化的多様性と特質を理解する能力、あるいは地域文化についての正確な理解の上に立ってさらにグローバルな観点からアプローチできる能力を備えた人物であるといえましょう。グローバル地域文化学部の教育目標は、まさにそのような人物の育成にあります。同志社大学の建学の精神と教育理念を援用して言えば、「良心」をもって地域の特殊性に関わ

りながらも「国際主義」的なものの見方を忘れない人物の育成といってもいいでしょう。

2. 開設の経緯と現状

グローバル地域文化学部開設のための最初の大きな方向付けは、2008年3月13日の大学評議会決定において与えられました。そこでは、「言語文化教育研究センター」の教育研究組織を二分割し、今出川校地と京田辺校地のそれぞれに学部を設置することが決定されました。このうち京田辺校地については既に2011年度にグローバル・コミュニケーション学部が開設されています。そして、今出川校地の新学部については「アジア地域、アメリカ地域、ヨーロッパ地域などを対象とする学際的・総合的で国際的な地域理解能力を持つ人物の育成に特化する学部」であることが明記されました。まさにこの時の基本方針を実現させたのがグローバル地域文化学部なのですが、ここでもうひとつ特筆すべきは、本学部の教員が言語文化教育研究センターに所属していた教員を母体としてということです。多年にわたって同志社大学全体の外国語教育や国際教養教育に携わってきた言語文化教育研究センターは、グローバル地域文化学部の開設と共に姿を消しましたが、その教員たちは、単に外国語の教師というにとどまらず、その言語が話される地域の社会や文化についての深い知識や経験をもっています。本学部の教育が高度の外国語能力の養成と国際的な地域文化に対する理解力の涵養に主眼を置いている以上、理想的な教員スタッフであ

るといえましょう。

以上のような経緯を経て、グローバル地域文化学部はグローバル地域文化学科一学科の学部として開設されるに至りました。学科の中には先述した評議会決定でも示されていたように、「ヨーロッパコース」(70名)「アジア・太平洋コース」(60名)「アメリカコース」(50名)の3コースが置かれ、入学定員180名、収容定員720名、専任教員56名の学部として発足しました。

3. カリキュラムの特徴

グローバル地域文化学部のカリキュラムの基本柱は、世界の諸地域が抱える現代的問題を、それぞれの地域文化の「歴史的形成」「文化的多様性」そして「地域と地球規模の課題」という3つの側面から総合的に理解する力を育てることにあります。ただし初年次ではまず、グローバルな視点をもつためのきめ細かい導入科目と共に、複数の語学の集中的な履修を義務付けています。こうした基礎教育が、「歴史的形成」「文化的多様性」「地域と地球規模の課題」を扱う専門教育科目へと有機的に、そしてスムーズに結びついていくことによって、本学部カリキュラムの中核部分は形成されていくのですが、ここで特徴的なことは、グローバル・イシューを扱う科目(グローバル・イシュー科目群)を選択必修で3コースに横断的に設置していることです。それぞれが学んでいる地域の文化や政治、経済などについて、地域偏重に陥らず、グローバルな視点を学生たちに持つてもらうことが目的です。一定の地域の言語や文化に通じる

だけではなく、それらの地域文化に対してグローバルな視点からアプローチできる人物の育成という本学部目的からすれば、このグローバル・イシュー科目群の設置は本学部のカリキュラム編成上欠くことのできないものだといえます。

このような科目履修によって特定地域の言語、文化、またそれらの地域が抱える様々な問題についてグローバルな視点で意識的かつ主体的に考える能力をつけてきた学生たちは、それぞれのコースの中に3年次・4年次必修科目として置かれているゼミ（グローバル地域文化発展セミナー・Ⅱ、グローバル地域文化専門セミナー・Ⅱ）において自らの課題を見出し、資料を集め、分析し、発表するという学問的訓練を経て、個々の卒業論文へと結実させていくことになります。

最後にグローバル地域文化学部における外国語教育について触れておきます。本学部の外国語教育科目はすべて「外国語関連科目群」としてまとめられており、地域に対する理解を深めるための基礎的スキルとして位置づけられています。英語、ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、ロシア語、コリア語、インドネシア語、トルコ語、ポルトガル語、アラビア語、イタリア語、カナダ圏フランス語など「グローバル」の名に恥じないメニューを揃えています。学生は、英語以外に他の語学を最低一つは選択し、集中的に学習することによって実践的な言語運用能力の向上に努めることになります。また、教室内での外国語学習を更に実践的なものにするために「スタディ・アブロード科目群」の中からいずれかの海外留学科目を履修しなければなりません。言い換えれば、行き先、外国語の種類、期

間などは問わないが、卒業までに最低一度は海外留学を体験することを学生に求めているのです。実用的な語学力の向上に役立つことはいまでもありませんが、異文化のただ中に身を置くことによって、当該地域の問題をまずは自分の肌で感じ取って来てほしいという願いもあります。「全員一度は海外に」という本学部のカリキュラム上のこの特色は、2012年度に本学が採択されたグローバル人材育成推進事業にも寄与を果たすであろうと考えています。

同志社 クローズ・アップ

音楽専攻科開設

待ち望まれた音楽専攻科が開設

2013年4月、同志社女子大学学芸学部音楽学科に音楽専攻科が開設され、1期生20人（定員20人）が入学し、修業年限1年の教育課程がスタートしました。より高度な演奏技術と音楽の専門知識を備えた音楽専門家、演奏家、音楽教育者などの育成をめざします。今まで音楽学科演奏専攻で4年間学んだ優秀な学生の受け皿として、音楽学会《頌啓会》特別専修生の制度（2013年3月で終了）があり、卒業後、音楽学科にて1年間、実技レッスンの個別指導を受け、修了演奏会では、磨きのかかった演奏を披露しておりました。学生に人気のある制度でありましたが、演奏技術の指導だけではなく、より高度な音楽の専門知識も授けることができる制度の検討が望まれており、この度、開設された音楽専攻科では、声楽、鍵盤楽器、管弦打楽器の三つの専攻の教育課程が設けられ、各々の専攻独自の科目と全専攻共通の科目でカリキュラムが構築されました。簡単に説明させていただきますと、専門実技レッスンのほか、声楽専攻においては歌曲、オラトリオ、オペラの研究など、鍵盤楽器専攻においては伴奏法や鍵盤楽器奏法研究など、管弦打楽器専攻ではオーケストラというように、実技・実践・演習・研究を充実させた科目が設置されました。また、全専攻共通の科目

は、音楽史特講、楽書講読、楽曲分析、音楽作品研究、音楽外国語、宗教音楽、京都の音・音楽、指揮法研究、アンサンブルなどであり、大学院レベルの授業内容となっています。なお、これらの科目の多くが教職科目として認定されており、定められた必修・選択必修科目の単位を取得することで、中学校教諭専修免許状（音楽）、高等学校教諭専修免許状（音楽）が取得できます。

修業年限1年の教育課程ではありますが、学部で学んだ知識や養われた音楽能力を発展させ、音楽を通して、どのように社会に貢献していけるかを学ぶ期間となります。また、内外のコンクールへの出場や海外留学の準備も行えることでしょう。

活躍する1期生

1期生20人の専攻は、声楽が6人、鍵盤楽器が9人（ピアノ8人、チェンバロ1人）、管弦打楽器が5人（フルート1人、ホルン1人、クラリネット2人、打楽器1人）となっています。彼女たちは高度な専門実技の指導を受ける傍ら、全専攻共通の授業に出席し、充実した学びの日々を過ごしています。新学期がスタートして約4カ月になりましたが、20人が一緒に学ぶ必修科目の授業では、クラスがひとつにまとまり、互いに刺激し合い高め合う良い関係が生まれています。演奏実技では、ソリ

女子大学学芸学部音楽学科主任・専攻科長

成田和子

同志社
クローズ・アップ

中学1年生の宿泊学習

香里中学校・高等学校教諭

いしづかしんや
石塚真也

墓前礼拝

本校では中学1年生の宿泊学習で岡山県的美作市を訪れています。本年度も4月18日～20日の2泊3日の日程で行いました。宿泊学習は、新入生が様々な活動や体験を通して同志社の一員になったことを自覚し、またこれから共に同志社で学ぶ友人を作る為の機会となっています。

まず京都駅に集合し、新島襄先生のお墓参りに向かいました。若王子山頂にある新島襄先生の墓前で礼拝を行い、入学の報告をしました。

中学1年生にとっては初めての校祖墓参です。急な山道を苦労しながら登り、新島先生の墓前で礼拝を行い、また新島先生の説明を受けました。新島先生と同志社への理解を深め、同志社の一員になったことを実感できたのではないのでしょうか。

下山後バスに乗り、兵庫県の「人と自然の博物館」にて館内見学を行い、その後、岡山県美作市の宿舎へと向かいました。宿舎到着後、学校生活のルールや仕組みを学ぶためのオリエンテーションを行いました。オリエンテーションの中で、カレッジソングとDOSHISHA CHEERの練習を行いました。生徒たちは、校歌が英語であることに驚き、苦戦しながらも大きな声で元気良くカレッジソングを歌っていました。

2日目は「友達を作る」ことを主なテーマに様々な活動を行いました。午前中は、岡山県の特産品である「備前焼」作りの体験を行いました。生徒たちは湯呑みやお皿など、それぞれ思い思いの作品を作り、焼き上がりを楽しみにしていました。午後からは体育館に移動し、運動会を行いました。種目は「ドッジボール」、「綱引き」、「クラス人クラス脚」です。生徒たちの

ストを務めたり伴奏者となったり、アンサンブルを編成したりと、学部生時代にはなかなかできなかったことに取り組んでいます。また、専攻科生は学部生のあこがれの一つになっており、彼女たちの存在は教育的効果をもたらしています。

6月15日には大阪のイシハラホールで、音楽学会《頌啓会》主催の新人演奏会「同志社女子大学音楽学科第61回卒業生によるジョイントコンサート」が行われました。コンサートの出演者は4人、いずれも音楽専攻科1期生でした。ピアノ、ソプラノ、打楽器・マリンバの難易度の高い作品が次々と披露され、観客は彼女たちの鮮やかな演奏に魅了されました。アンコールでは、バーンスタイン作曲のオペレッタ「キャンディード」の抜粋を4人で上演するなど、専攻科生ならではの華やかなステージでした。



「キャンディード」の抜粋を上演（新人演奏会）



日本の歌の合唱（八重コンサート）



モーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」の一場面（八重コンサート）



「花は咲く」を合唱（八重コンサート）

音楽専攻科入学試験概要

特別推薦入学試験（専願）と一般入学試験の二つの入学試験を行っています。

特別推薦入学試験での入学者は、学費補助として特別推薦入学奨学金の申請を行うことができます。

した。「2013年大河ドラマ特別展「八重の桜」の開催に合わせての企画です。コンサートの運営には専攻科生が丸ごと関わりました。プログラムは3部で構成され、第1部では懐かしい日本の歌や大河ドラマ「八重の桜」のテーマ曲など、第2部ではブッチーニやモーツァルトのオペラの名場面からのアリアや重唱などが上演されました。第3部の復興支援ソング「花は咲く」に続く「ふるさと」では、来場者も一緒に合唱して大いに盛り上がりました。別館ホールは満員で、専攻科生の手作りコンサートを存分に楽しんでいただけました。

感想の中で、この運動会が宿泊学習で一番印象に残った出来事に多く挙げられていました。運動会までは、緊張していたのか、自分を出し切れていなかった生徒もいましたが、運動会になると、体育館のいたるところで歓声が上がリ、それまでの控えめな彼らとは違う、素の自分たちをようやく出せるようになったようで、大変盛り上がりました。中でも、クラス人クラス脚では、生徒たちに練習する時間を与え、その後クラス毎のタイムを計測しました。練習の時間では、どうやら速くゴールまでたどり着けるのかをクラスで一生懸命話し合い、練習をしていました。アイデアを出す生徒、まとめる役割をする生徒など、普段授業では見られない一面を見せてくれました。本番を前に、あるクラスでは前日に練習したDOSHISHA CHEERを全員で行ってから本番に臨むクラスもありました。本番ではうまくいったクラスもあれば、失敗してしまったクラスもありましたが、結果は関係なく、生徒同士の仲が深まったように思います。さらに、2日目の夕食後には各クラスでクラス活動を行いました。内容はクラスによって自己紹介をしたり、クイズをしたり、歌を歌ったり様々でしたが、この頃にはクラス内で緊張も解け、より一層友達との輪を広げる機会になったように思います。

最終日はバター作り体験やバーベキューを行い、帰阪しました。以上のように様々な活動や体験を通して、これからの学校生活において共に学ぶ多くの友達を作り、同志社の一員であることを実感する機会となったと思います。これからも共に学ぶ友人達と楽しく、充実した学校生活を送ってもらいたいと思います。



クラス人クラス脚

同志社
クローズ・アップ中学生 人権福祉講演会
「劇団あしたの会」による講演およびパフォーマンス
テーマ「伝えあってみよう」

女子中学校・高等学校教頭 平松譲二

聞こえない者と聞こえる者が共に楽しめる芝居創りをしている「あしたの会」の劇団員が、2013年6月14日、本校栄光館にてその芝居創りの過程を映像と手話で語ってくださいました。そして、パントマイムなどを含め、本校中学生と伝え合う体験ができる場を見事に創り上げてくださった。

劇団あしたの会との出会い(マイノリティーの体験)

以前、2010年8月28日に開催された劇団あしたの会第13回公演「ふたつの青空」を、個人的に鑑賞させていただいたことが今回の中学生講演会のきっかけとなった。まさに音のない世界で創り上げられる演劇であり、最初は少々戸惑ったりもしたがすぐにその魅力に引き込まれていった。私にとつての驚きは、手話が共通の会話の手段として使われ、手話のわからない人のために字幕が用意されていたことである。私たちが普通考えるのは、耳の聞こえない人のために用意される字幕であるが、これは手話のわからない私のような人間のための字幕であったのである。その場にいたほとんどの人は手話が理解でき、手話

により、耳の聞こえない人たちが生きている世界への気づきを与えられた。そして、劇団あしたの会の演劇を、ぜひ本校の生徒たちに鑑賞させたいと素直に思った。

ふたつの青空

幸いなことに、今回の講演会にも「ふたつの青空」のキャストのお二人、蒲原敏光さんと一文字鷹さんが来てくださった。そして、この「ふたつの青空」の講演を創り上げる困難さや実際の練習風景を映像などを交えて話してくださいました。そのストーリーは、一人のろうあ者が第2次世界大戦中に、徴用で網走の石切り場に放り込まれたという実話であった。少なくとも私は全く知らなかった歴史で、このろうあ者は朝鮮から駆り出された人たちと共に、過酷な強制労働と奴隷同然の扱いを受けたのである。その体験を、約三十年後に一人の青年ろうあ者との出会いを通して、明らかにしていた長谷川氏の証言が演じられていた。その長谷川氏が蒲原さんで、青年ろうあ者が一文字さんであった。

パントマイム

まず、生徒たちが彼らの魅力に引きつけられたのは、かばんを自由に操るパントマイムの演技であった。ひとつのかばんが自分の意思を持つているかのように、宙に浮いたり、ひとりですわたりするように演じてくださった。そして、いつしか私たちは、彼らが耳が聞こえず言葉も話せないということを忘れていた気がする。生徒たちも壇上へあがっていただき、彼らと一緒にパントマイムを演技する機会を得た。約二十人の生徒たちが舞台に上がり、彼らと息を合わせて何種類かのパントマイムを体験できた。まるで壁があるかのように空を叩き、風船を膨らまし、綱引きをするなど、どれも本当に壁や風船、綱があるかのように楽しむことができた。そして、彼ら二人と舞台の生徒たち、会場の生徒たちとの間に、声はなくてもお互いに通じ合い、表情や動作だけで見事に会話が成り立っている瞬間が生まれた。

手話による拍手

手話もいくつか教えていただいた。ごく基本的な「ありがとう」や「いただきます」など、実際にみんなで手話



劇団あしたの会のお二人による演技



かばんのパントマイム

を体験した。そして私たちは、手話にはいくつかの魅力があることに気づかされた。手話は世界共通語にもなりえる可能性があるということや、その手話が見えさえすれば、お互いに思いや感情を伝え合えることができるということなどである。また、私にとって新鮮な気付きは、手話による拍手方法であった。私たちは普通、手を叩いて拍手をするが、耳の聞こえない人々にとってその拍手は全く聞こえないのである。そして、彼らの拍手の方法を教えていただいた。それは、両手を高く上げて、両手をくるくると振るのだ。生徒たちは彼らの演技や話の終わりに、全員が両手を高く上げて手話による拍手をしていた。

私たちのあたりまえ

私たちは通常、耳で聞き声で会話する。それがあたりまえすぎて、大切なことを忘れてしまっている気がした。今回、人と人とが本当の意味で心を通じ合わせて会話するということが、声による会話だけではないという新たな視点と気づきを与えられた。耳の聞こえる人も、耳の聞こえない人も、心を通わせることによってはじめて本当の意味の会話が成り立ち、理解し合えるということを見せていただいた。



綱引きのパントマイムを一緒に楽しむ生徒たち

同志社
クローズ・アップハーバード大学サマースクール
(Harvard University Summer School)
を経験させる意義国際中学校・高等学校教諭
国際教育センター主任古城正裕
こじょうまさひろ

昨年の2名の派遣に続き、今年も高校2年生の3名をハーバード大学の行うサマースクールに送り出した。国際社会で本当に活躍できる人材となるためには、世界のトップレベルの人たちが集まってくる場に身を置き、その人たちが何を考え、どのような人生の目標を持って、どのような生き方をしているのかをこの時期に直に学べる環境が必要であると考える。

【HUSSの概略】

HUSSは6月下旬から8月上旬の7週間のサマースクール。人文学、社会学、芸術系、ビジネス、コンピュータ科学、数学、工学系、環境学、環境科学、外国語、文学、執筆学などの300を越すコースが設置されている。その中にはハーバード大学の「入学前単位認定」によってハーバード大学の単位が取得できるものもある。2012年のケースでは世界100カ国以上、14歳から81歳までの高校生、大学生、一般社会人が合計6,000人程度参加し、約2,000人が寮に滞在した。語学力では全ての参加者にTOEFLで100点以上が要求され

【参加によって得られるもの】

る。高校生を対象とした補講では、大学の出願に必要なエッセイ指導、読書指導、学習指導、時間の使い方指導、学習戦略などの対策講座も開設されている。また、授業に質問がある場合は、予約をとっておけばハーバード大学の教授がOfficeでサポートするサービスもある。

一方、コンサート、ボランティアアーク、タレントショーなどのイベントが企画されていたり、スポーツ活動やダンスなどに参加できるなど、学問だけを提供するプログラムではないし、彼らはそんな退屈な生き方をしている人たちではない。

HUSSが世界最高峰の教育を提供するのは周知のこと。それを求めて世界中から選りすぐりの参加者が集まってくる。色々な能力に長けた、大変魅力的な人たちの集団である。接する機会が一番多いのは高校生であるが、中には青年実業家やCEOもいる。ハーバードや他大学の学生もいる。予想以上に面白い人たちが集まってくる。そのため、参加者のダイバーシテ

イーの広がりには国籍や性別だけではない。これによって、ディ
スカッションのレベルを見ても、その高さや興行は想像を超え
ている。日本においては決して出会うことのないレベルであり、
出会うことのない人と交流を持って、経験豊富な人と同じ土俵で
論じ合ったり、励まし合ったりできる。HUSに参加を認め
られたレベルの人が何を考え、どのような人生の目標を持って、
どのような生き方をしているのかを直接、目で見て、耳で聞い
て、肌で感じる素晴らしい機会となる。

【世界のレベルの高さを知る】

日本は世界の中でも最も競争の緩い国の一つ。大学3年生の
冬から始まる就職活動の競争でもキャリアをもった転職組と戦
うことはない。それは、日本の採用制度が新卒一括採用である
ため、戦う相手はノンキャリアの経験や実力のないもの同士。
インターンシップ制度も充実していないため、就職までに身に
つけた実力という観点からもほとんど全員が同じレベルで大差
がない。海外の多くでは就活の段階で自分がどう活躍できるか
という将来のビジョンが明確になっている必要がある。社会に
出て行く時の実力や意識の差は歴然だ。

【今後に向けて】

最近、学生が内向き志向が強まっていると言われるが、少な
くとも世界に飛び出していくトップ層にそのような傾向は全く
感じない。しかし、彼らの多くが将来国際人になりたいという
夢を持ちつつも、具体的な策をあまり知らないことが多い。世

界で通用する人材になるためには、高いレベルで経験豊富な人
たちと交流をもち、こうやって自分の国を、こういう手段で世
界を変えたい、というような大きな野心や想いが必要。それを
多くの幅広い人たちと議論し合い、改良していく力が必要だと
思う。

今後、このように世界最高峰の教育を受け、世界トップクラ
スの人と互いに刺激し合い、世界規模で物事を考えられるよう
になったものが帰国する。すでに種蒔きは始まっている。この
彼らの経験を将来につなげるデザインは多く存在すると思うが、
こういう学生が活躍できるように私たちも挑戦していかなければなら
ない。

同志社 クローズ・アップ

UOI(探究の単位)を核にした、つながりの拡張を 目指して IB Primary Years Programme (IB初等課程プログラム)

国際学院初等部教諭

すぎやまもとひろ
杉山元洋

1. はじめに：開校してから2年を経て...

「4月に開校した後、6週間を単位とする初めてUOI (Unit of Inquiry/探究の単位)」を5月末に終えました。本稿では、
児童による探究型学習の実現を目指しての週8時間のUOIに
ついて、単元の協同計画やリフレクションに使っている「PYP
Planners」という指導計画書兼報告書のような書類の項目を使
って、1年生の単元を紹介します。」

上記のように、本校のUOIについて報告させて頂いてから、
2年が経ちました。開校時は3年生だった最上級生が今は5年
生になり、約270名の児童が通っています。これに伴い、教
員も増え、各学年には担任2人に加えて、学年付きのNative
English Speakerの教員 (GANET) も配置されています。

2. PYP(Primary Years Programme)の進展：PYP 候補校(Candidate School)

開校時には、何とか始めた国際バカロレア機構 (IB) のPYP
に基づいたカリキュラム実践も、今年9月よりDIA初等部が正
式な候補校になり、IBから指定されたコンサルタントのアド
バイスを受けながら、2年ないし3年後の認定/Authorization

3. 「つながり」と しての「超教 科的な学び」

PYPの学校の本質は、
IBの用語であるTrans-
disciplinary Learning
/超教科的な学習にあ
ると考えています。超
教科的な学習とは、①
社会科学や理科をベース
とした世界で起きている
現実の問題に向き合
うUOIを核に、他の
すべての教科学習や学
校内の活動をできるか
ぎりつなげていくこと
②1年間で6つ行う
UOIは、それぞれ6つ

に向けて歩き始めました。

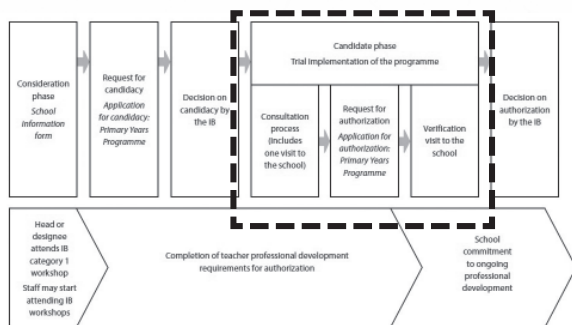


Figure 1: Stages of the authorization process

図1 認定校になるまでの過程における候補校の段階
("Guide to school authorization: Primary Years Programme" より)

のTransdisciplinary Theme／超教科的テーマ（表1）の下に属しており、各学年もこのテーマによって縦につながっていくこと、であると言えます。

4. 超教科的な学びを生み出す教員間の協同

これを実現する仕組みとして挙げられるのは、第一に、各学年の担任や学年付き教員間はもちろんのこと、専科教員も含めた協同です。PYPでは定期的に、協同によるプランニング時間を確保することが求められています。

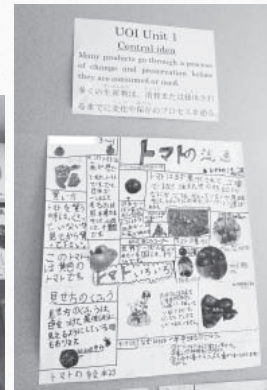


図2 UOIのCentral Ideaと児童のまとめ(3年生)



図3 UOIとArtの超教科的な学びの例(3年生)

んだものです。また、私が担当している4年生の「ことば」（国語に相当）では、UOIで学習していた「水の循環」との関わりから、「水の循環や水資源のために私たちにできること」というテーマによって児童に執筆依頼を出して、提出されたものをまとめて冊子にする予定です。

更に、これまで日本語と英語で、別々のスケジュールで関連性もあり意識できずに実施していたUOIとUOIEも、今年度から同じCentral Ideaを学習目標として共有し、同じ時期に一つのUnitとして実施するようになりました。

5. つながりを生み出す他の仕組み

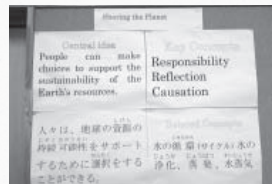


図4 UOIのJ(Japanese)とE(English)で目指す学習理解目標(Central Idea)の教室掲示(4年生)

超教科的な学びを可能にするPYPの仕組みは他にもあります。一つは、上述の学習記録の役割も果たすPYP Plannerを作成参照することであり、過去のPYP Plannerによって、担任や教員は、現在担当している児童集団がこれまでどのような学びをしてきたのかを知ることができ、新しい学びがこれまでの学びにつながるように前もって計画することができ、また、これから行うUnitが昨年度どのように行われ、どんな反省点があったのかを知り、改善していくこともできます。これは、過去の教員との協同とも言えます。

もう一つは、新しい学びに入る直前に、教員が確実に実施することが求められている、児童の既有知識や理解の評価があります。教員は、児童の今の状態につながるように、学習活動や経験を計画・調整することが求められます。このような教員間のつながりや、学びや経験を関連づけることにより、児童による超教科的な学びが可能になります。

6. DISKのつながり

つながりは、同じキャンパスにあるDISK (Doshisha Inter-

表1 2013年度 超教科的テーマに属する学年ごとのUOI

学年	Who We Are	Where We Are in Place and Time	How We Express Ourselves	How the World Works	How We Organize Ourselves	Sharing the Planet
1	人と人との関係は、健康や幸せにつながっている。	移動／旅によって私たちは変わり、新しい経験をする。	ストーリーは観客を引き込み、意味を伝える。	全ての生き物は変化の道を持つ。	みんなで使う場所、人はまわりとつながりをつくらなければならない。	すべての生き物は、生き残っていくために、健康的な住む場所を必要とする。
2	私たちの選択は、健康や幸福に影響を与える。	構造は、文化や地域の様子や条件を反映している。	お祝いや祭りごと、伝統のしきたりや行事は、みんなが持っている信念や価値を表している。	人々は、力やエネルギーについてわかったことを利用して新しいものをつくり出す。	人々は、自分が属する集団社会で果たしている役割を果している。	生き物は、生き残るために、変化、応答する必要がある。
3	自分の特徴や能力、興味を意識して考えることは、私たちの学びや成長を広げる。	人工物を解釈することは、人々の歴史の理解に役立つ。	アートを通して、人間は、自分らしさを伝えるための異なった表現の形式を使う。	人間の進歩を支えるため、エネルギーは変換されたり、形を変えたりされて使われている。	人々は、自分やエネルギーの消費または使用によって変化するプロセスを通して。	自然環境とふれ合う時に、人間が取る選択は、他の生き物に影響を及ぼす。
4	ロールモデルの選択には、個人や社会の信念や価値観が反映されている。	地球上の地理や地形は、人間の相互作用や居住に影響を与える。	歴史を通して、人々はシンボルを使ってお互いに交流してきた。	物質は、特定の反応を示し、相互作用をして、それが、人々がどのように扱うかを決定する。	人々は、問題を解決することと人々の努力や事業をサポートするための組織をつくり出す。	人々は、地球の資源の持続可能性をサポートするために選択をすることができ。
5	体内のシステム間での効果的な相互作用は、健康と生存に貢献している。	過去の文明の証拠は、現代社会に役立つつながりを創り出すのに使われる。	人々は、特定の視覚者をわらったメッセージを作りだし、または、操作することができる。	地球上や大気中の変化は、人々の暮らしに及ぼす影響を及ぼす。	経済活動は、商品やサービスの生産、交換、消費のシステムにかかっている。	生物の多様性は、システム内の組織体の相互に依存したバランスの維持に依っている。
6	文化的背景は、私たちの信念や価値観に影響し、行動にあらわれる。	人々の移動は挑戦やリスク、機会への応答である。	芸術の作成、それと私たちを取り巻く世界への理解を発展させるものである。	科学的な知識への理解は日々進歩しており、それは人々への生活に影響を及ぼす。	政治や国のありかたは国民の生活に影響する。	人々は地球の資源を守るため、様々な事を実践し、確立できる。



図5 DIA PYP Meetingの様子

national School, Kyoto) にも広がっています。これまでは、両校でやはり時期も内容も異なっていたUOIでしたが、同じ時期に同じテーマ（表1）のものを実施し、概念的 理解の鍵となるKey Conceptを共有するようになりました。また、学年数に違いがあり全学年ではありませんが、半数の学年では学習目標であるCentral Ideaも共有しています。これを元に、毎月両校の担任と専科教員が集まって、DIA PYP Meetingを開き、次のUOIのPlanningを共有しています。

7. 地域や法人内へのつながりの拡張

つながりはキャンパスを超え、本校のある木津川市地域や他の同志社の法人にもお願いしています。春学期のUOIの校外学習では、木津川エコクラブや木津川河川レンジャーの方にお世話になりました。また、夏休みのUOIの教員研修には同志社女子大学の先生にご協力を頂く予定です。年度後半のUOIには、国際教育インスティテュートの先生にもゲストスピーカーとしてお越し頂く予定です。表1に、2013年度の本校のUOIの理解目標としてのCentral Ideaがあります。「自分にもつながる」と思われた方は是非、一報頂きたく存じます。同って、関連するUOIについて説明させて頂きます。2年前に報告させていただいた「わたしたちのUOI」が「みんなのUOI」になる日を夢見しています。